

藤 橋 遺 跡

—「ふるさと歴史の広場」事業に伴う発掘調査—

1991

長岡市教育委員会

序

史跡「藤橋遺跡」は平成元年度から文化庁の新規事業である「ふるさと歴史の広場」事業の採択を受け、3カ年計画で史跡整備事業を行っています。「ふるさと歴史の広場」事業は、遺跡の紹介・案内をする「ガイダンス施設」、住居跡などの遺構を発掘したままで展示する「遺構露出保護展示施設」、住居などを復原展示する「歴史的建造物等の復原」、それに修景施設などを設け、遺跡を分かりやすく立体的に整備し、活用を図るものです。

今回の発掘調査は「歴史的建造物等の復原」のため、掘立柱建物跡の検出を目的に行いました。この結果、5棟の掘立柱建物を発見し、このうちの3棟で建物の復原を行っています。

発掘調査から建物の復原にあたっては、宮本長二郎先生（奈良国立文化財研究所）、文化庁、新潟県教育委員会をはじめ、多くの方々から御指導・御協力をいただきました。ここに心より厚くお礼を申し上げます。

平成3年3月

長岡市教育委員会

教育長 丸山 博

例 言

1. 本書は史跡「藤橋遺跡」の「ふるさと歴史の広場」事業に伴う発掘調査の記録である。
2. 調査は長岡市教育委員会が主体となり、平成2年7月から8月に実施した。
3. 本書は駒形と小林が小熊博史氏（長岡市市史編さん室）の協力を受けて小林が3-(1)土器を、他は駒形が執筆し、全体を駒形がまとめた。

目 次

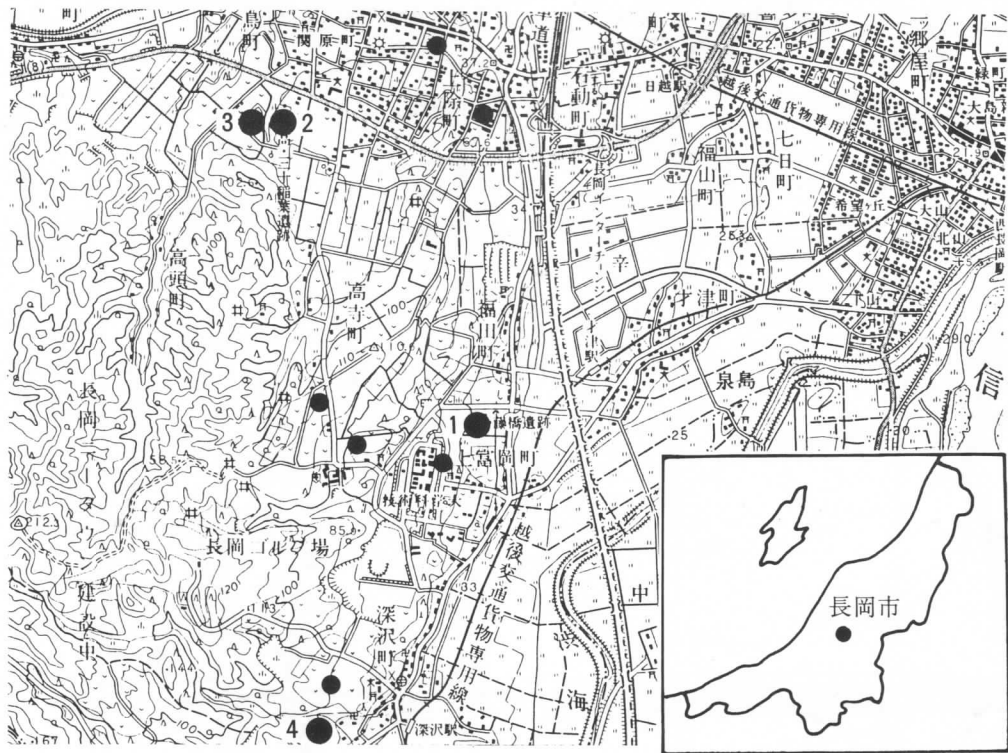
1. はじめに…………… 1
2. 遺構…………… 3
3. 遺物…………… 9
4. まとめ…………… 16

1. はじめに

藤橋遺跡は、昭和26年12月の長岡市立科学博物館の発掘調査以来、今次調査を含め6次にわたって発掘・確認調査が行われている。昭和50・51年の試掘調査では、藤橋遺跡の遺構・遺物の集中箇所が第1地点から第4地点に分かれていることと、時間及び遺跡の内容が縄文時代後期から晩期の集落跡であること、中世の館跡であること、を確認している（駒形・寺崎ほか「埋蔵文化財調査報告書—藤橋遺跡・尾立遺跡・旧富岡農学校跡遺跡—」長岡市藤橋遺跡等発掘調査委員会 1977年）。

その後、昭和53年には新潟県を代表する縄文晩期の集落で、さらにヒスイなどの玉作りの遺跡であることなどから国の史跡に指定され、昭和58年から昭和63年にかけて史跡環境整備事業が行われた。そして、平成元年度からは文化庁の新規事業である「ふるさと歴史の広場」事業の採択を受けて、ガイダンス施設・遺構露出保護展示施設・歴史的建造物等の復原などの整備を進めている。

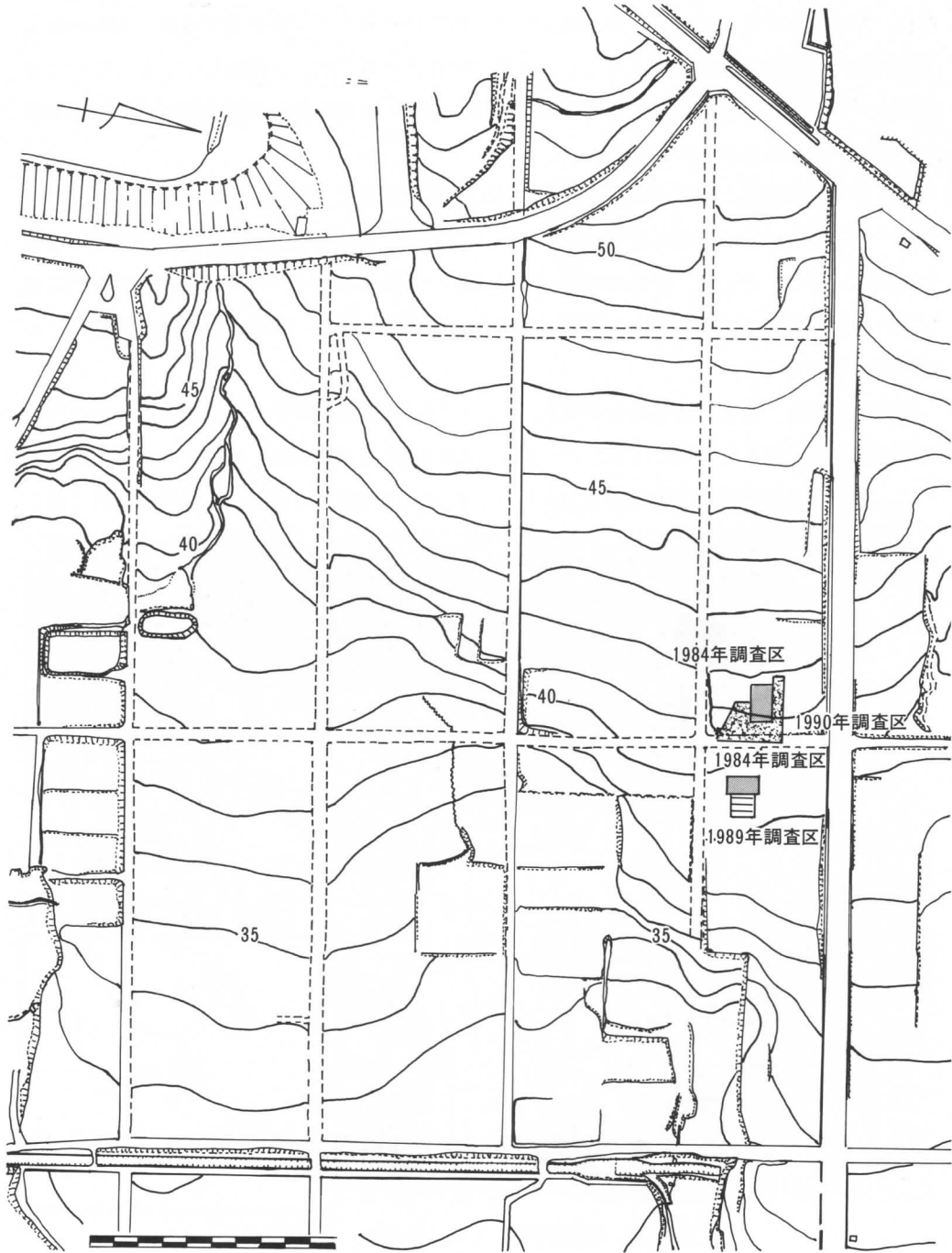
今回の調査は「歴史的建造物等の復原」で、縄文時代晩期の掘立柱建物を復原するため、掘立柱建物跡の検出を目的に実施した。調査は昭和59年に発掘調査した露Ⅰ—西地区の成果—柱穴跡と合わせて掘立柱建物跡を探るため、西地区に隣接して調査区を設け、平成2年7



第1図 遺跡位置図 (1/50,000 長岡)

1. 藤橋 2. 馬高 3. 三十稻場 4. 岩野原

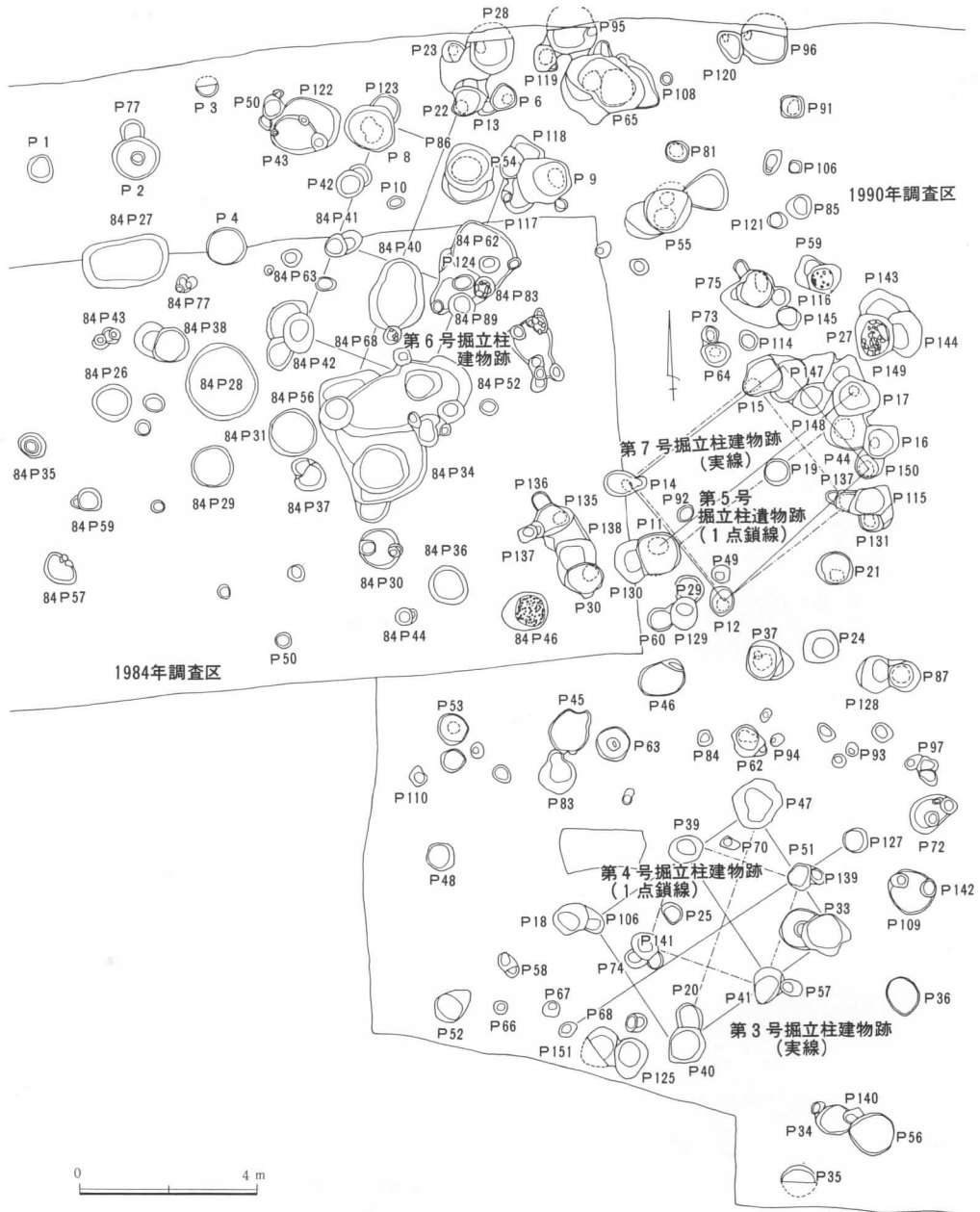
月から8月にかけて行った。なお、調査後には発見した掘立柱建物跡の原位置で、3棟の掘立柱建物の復原工事を進めている。



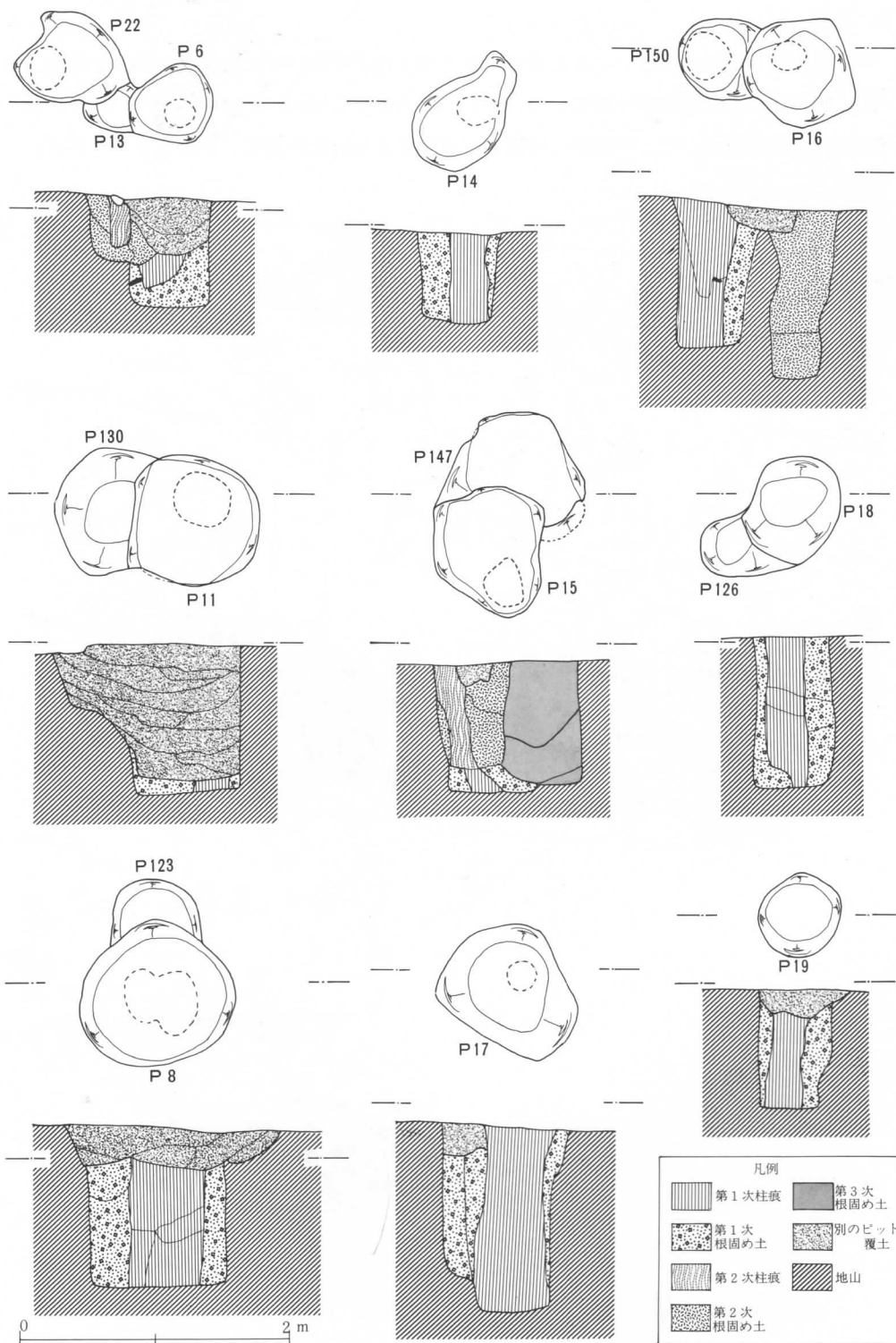
第2図 遺跡の地形図及び発掘区設定図

2. 遺構

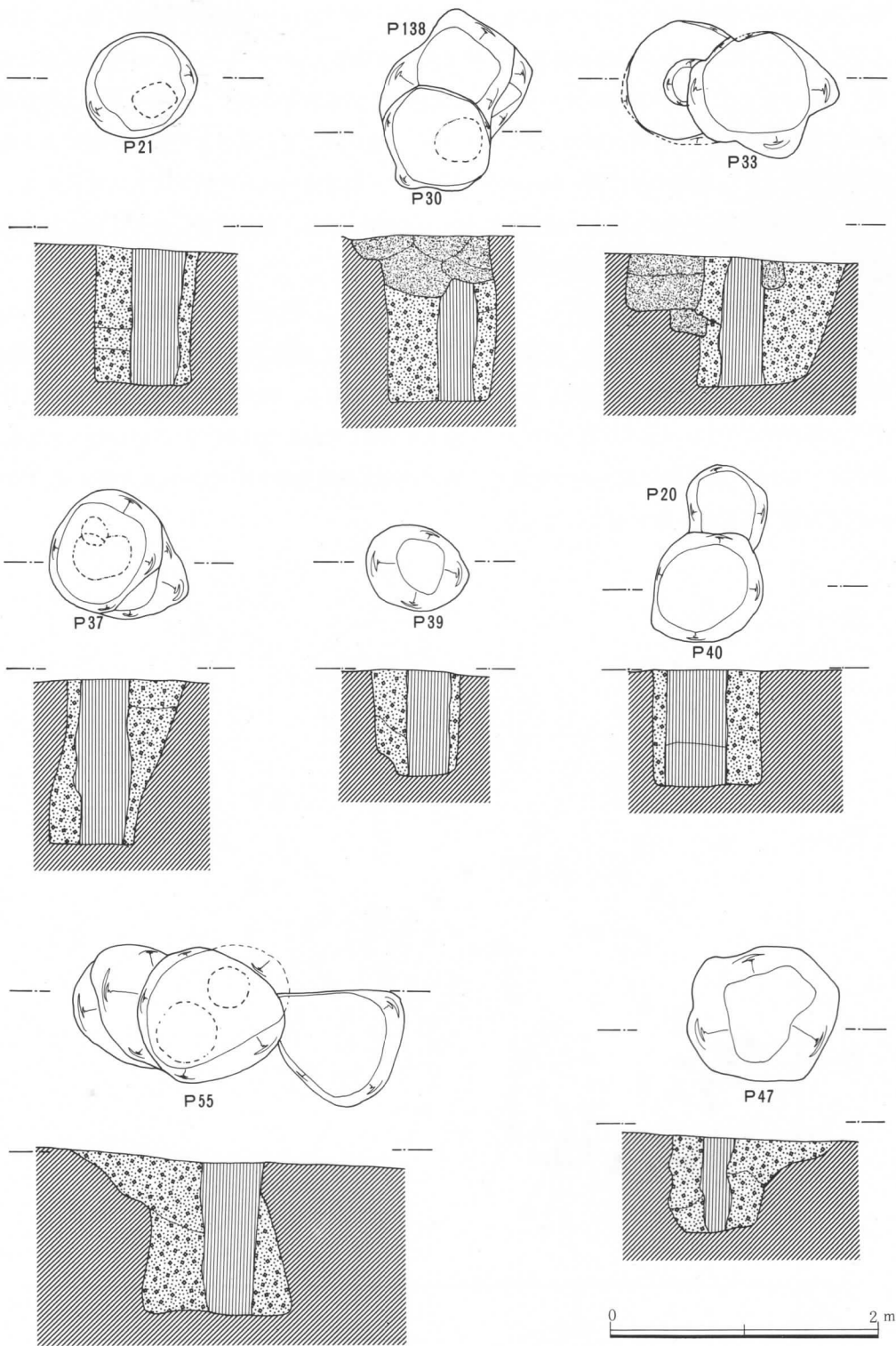
藤橋遺跡の第1地点では、これまでの調査で縄文時代晩期の掘立柱建物の柱穴を数多く検出し、2棟の掘立柱建物跡を想定した。今回の調査地でも120基以上の柱穴を検出し、5棟の掘立柱建物跡を想定した。本調査には掘立柱建物跡及び柱穴の他に、貯蔵穴などもある。



第3図 遺構全体図



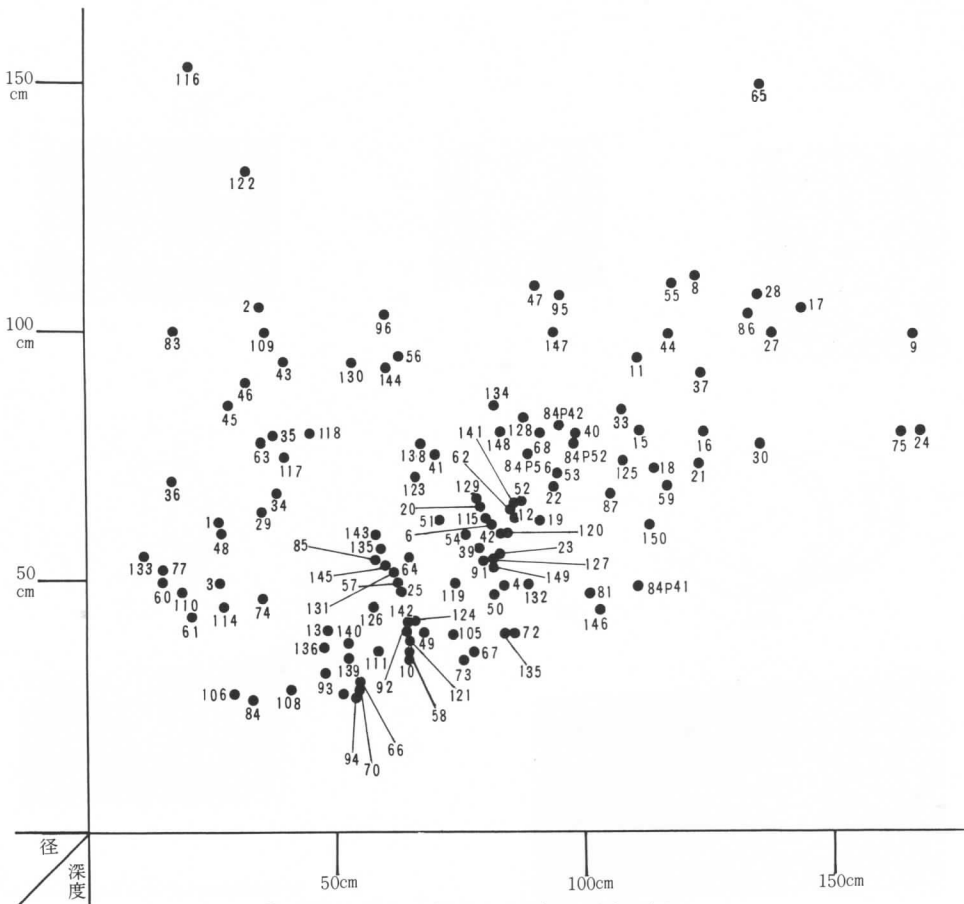
第4図 柱穴跡平面・断面図(1)



第5图 柱穴迹平面·断面图(2)

第6図は今回の調査検出ピットの掘り形径と深度を、第7図は土層断面の観察(第4・5図)と、柱穴底面に残るオレンジ色の輪郭から柱痕跡の直径をまとめたものである(柱穴底面に青白く円形になって、その輪郭がオレンジ色に変色している箇所があり、その位置が土層観察による柱痕跡と一致する例が極めて多い。おそらく柱が土に変えるときの還元作用による痕跡と思われる)。藤橋の柱は20~40cmのものが多く、中には80cmもの極めて太い柱もある。なお、建物跡番号は1989年調査の建物跡に続く(駒形・小熊「藤橋遺跡における掘立柱建物跡の調査」長岡市立科学博物館研究報告第25号 1990年)。

◎第3号掘立柱建物跡(第8図) 調査地南側に位置し、桁行2間、梁間1間、妻側から外に棟持柱を持つ建物跡である。柱間寸法は桁行が4.4m、梁間は3.4mで、妻側から棟持柱の出(張り出し)は1.8m(P151)と1.5m(P127)である。柱穴の規模は、他の柱穴より小さい棟持柱のP151の掘り形径(30cm)・深さ(50cm)である他は掘り形の径が68~112cm、深さ57~105cm、柱痕跡が30~45cmを測る。第3号掘立柱建物跡のP33からは大洞A式、P39からは大洞C1式の土器が出土している。

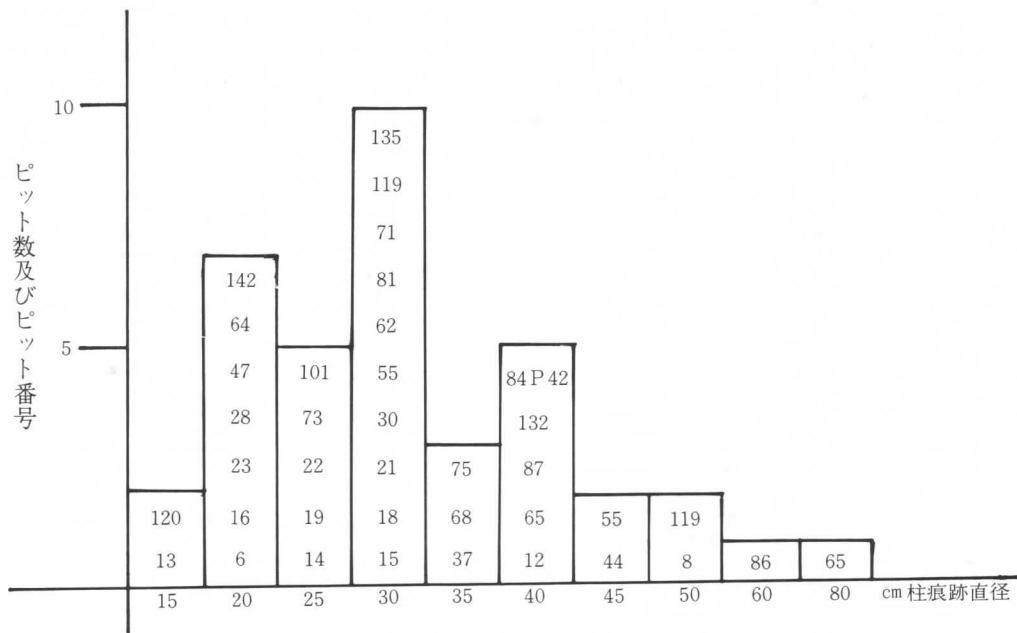


第6図 柱穴の径及び深度の測定グラフ

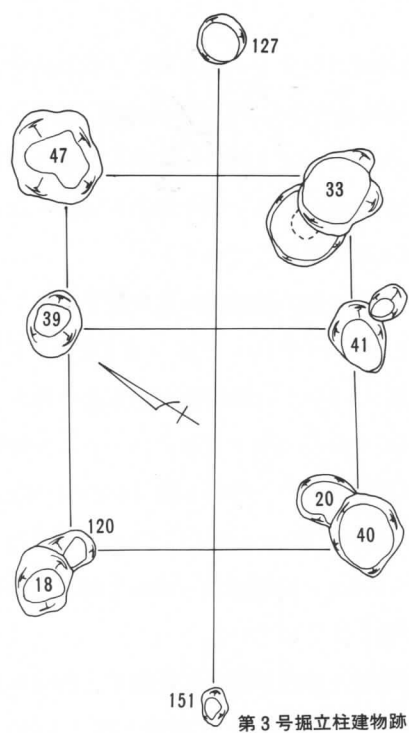
◎第4号掘立柱建物跡（第8図） 第3号掘立柱建物跡の柱穴を一部共有し、軸線が北に振れた位置にある。形態は桁行・梁間ともに1間で、棟持柱を持つ。第4号の規模は桁行2.5m、梁間2.8m、棟持柱の妻側からの出は1.3m（P20）と、1.2m（P47）を測る。柱穴の規模は掘り形径が60～100cm、深さ63～84cm、柱痕跡は33～45cmである。第4号のP39からは大洞BC式、P40・P41から大洞C1・C2式の雲形文土器が出土している。

◎第5・7号掘立柱建物跡（第8図） 発掘区中央で、2棟の建物跡が柱穴跡を共有しながら重なるように位置していた。第5号はP11・P12・P44・P15・P17・P132の6本で構成し、形態・規模は、桁行1間（3.6m）、梁間1間（3.5m）に棟持柱が出る亀甲形を呈している。棟持柱の出は、50cm（P11）と90cm（P44）である。第7号はP11・P17を棟持柱として、P12・P14・P147・P150の柱穴で構成する建物跡で、桁行1間（4.5m）・梁間1間（3.3m）に棟持柱が妻側から出ている。棟持柱の出は、50cm（P11）と83cm（P17）である。柱穴の規模は掘り形径が60～110cm、深さ65～110cm、柱痕跡25～45cmを測る。第5・7号で共有する柱穴のP11及びP17から大洞A式の土器が出土している。

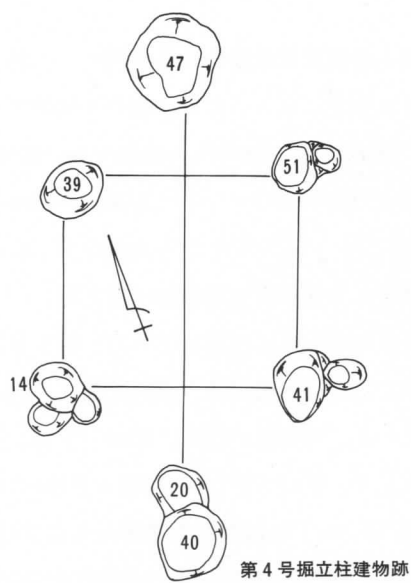
◎第6号掘立柱建物跡（第8図） 第6号掘立柱建物跡の位置は調査区北側で、1984年調査の柱穴と整合させながら建物跡を想定した。形態は桁行2間（5.1m）、梁間1間（3m）に棟持柱がつく形態で、棟持柱の出は1.2m（84P56）及び1m（P22）を測る。柱穴は掘り形径40～100cm、深さ66～112cm、柱痕跡が25～50cmである。第6号掘立柱建物跡の柱穴（P8）からは晩期中葉の大洞C1・C2式の土器が出土している。



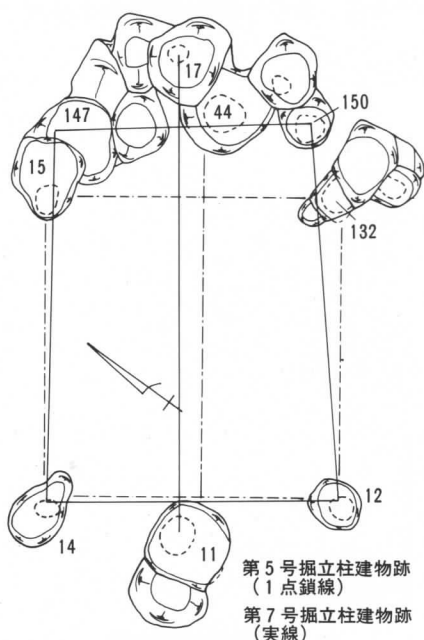
第7図 柱痕跡直径計測グラフ（棒グラフ中の数字は柱穴番号）



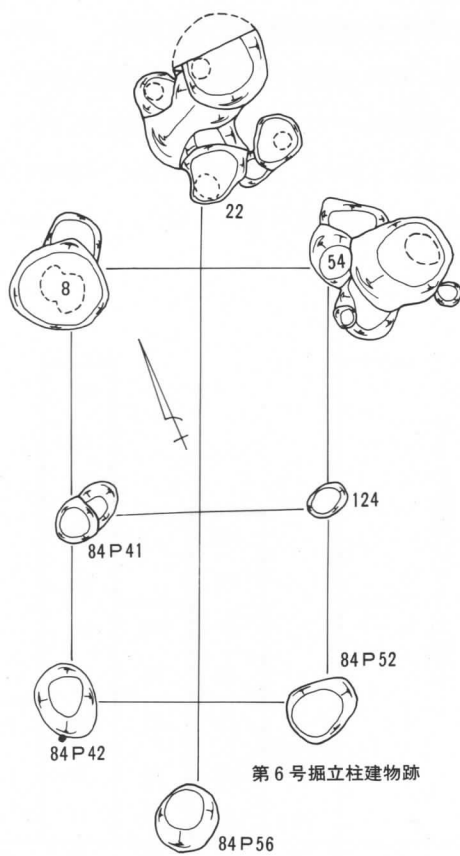
第3号掘立柱建物跡



第4号掘立柱建物跡



第5号掘立柱建物跡
(1点鎖線)
第7号掘立柱建物跡
(実線)



第6号掘立柱建物跡

第8图 掘立柱建物跡

3. 遺物 (第9～13・17図)

今回の調査で出土した遺物は、縄文土器や石鏃・石槍・石錘・板状石器・磨製石斧などの石器、それに石棒などの石製品である。これらの遺物は大半が掘立柱穴跡などのピットから出土し、包含層からの出土遺物は少なかった。これらの遺物は大部分が縄文時代晩期に属している。以下、代表的な資料をあげ、その概要を報告する。

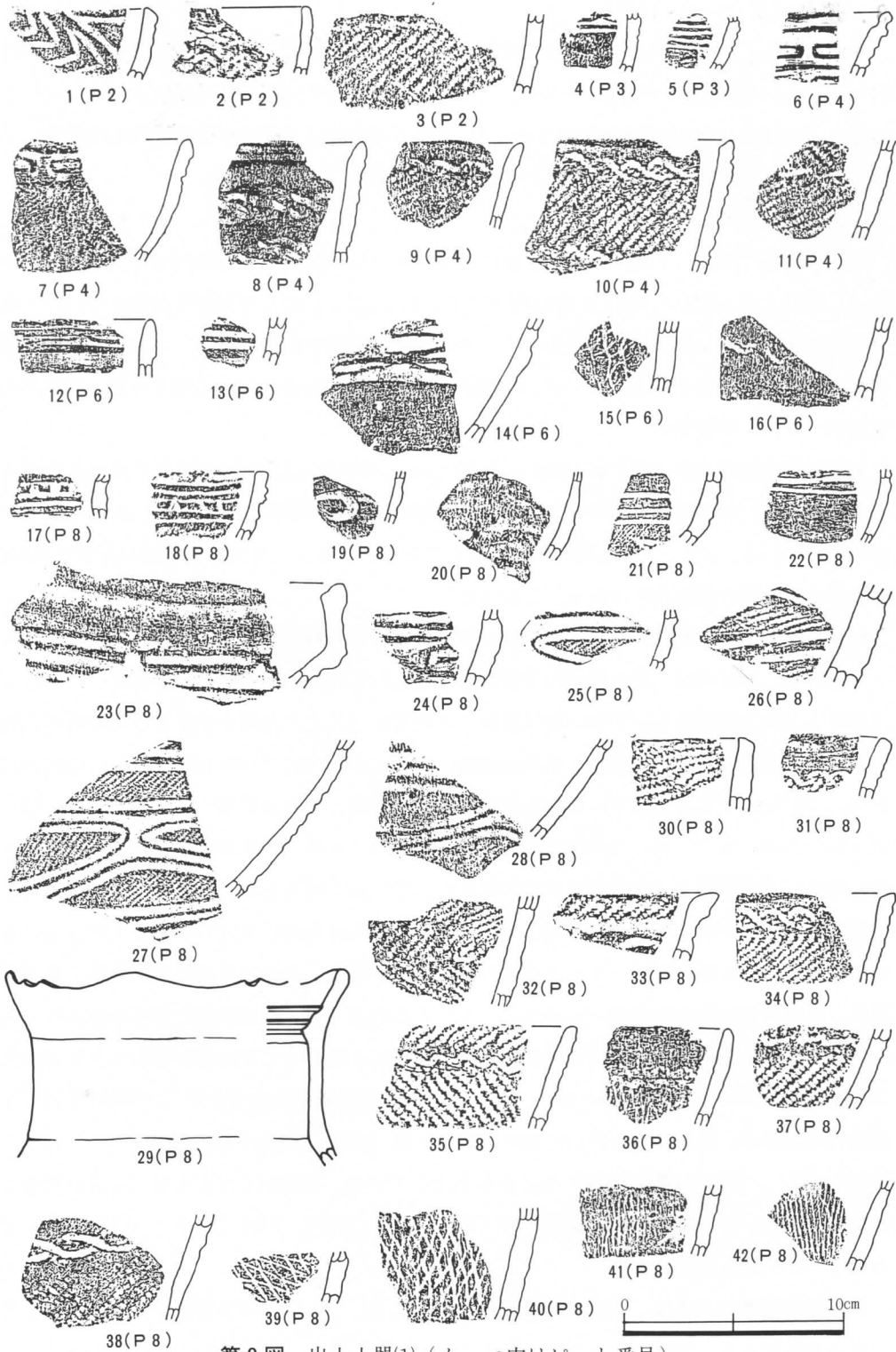
(1) 縄文土器 (第9～13図)

今回の調査で出土した縄文土器は、総破片数5,165点、総重量49.665kgを数えた。その大半はピット出土で、総数4,784点、重量45.590kgである。ピット出土の土器は点数は多いが、時期の詳細が明らかな資料は極めて少なく、器面全体に縄文を施すだけの、いわゆる「粗製深鉢形土器」の類が大半を占めている。時期の詳細の判明するのは、東北地方晩期土器編年の大洞B～A式に並行する。

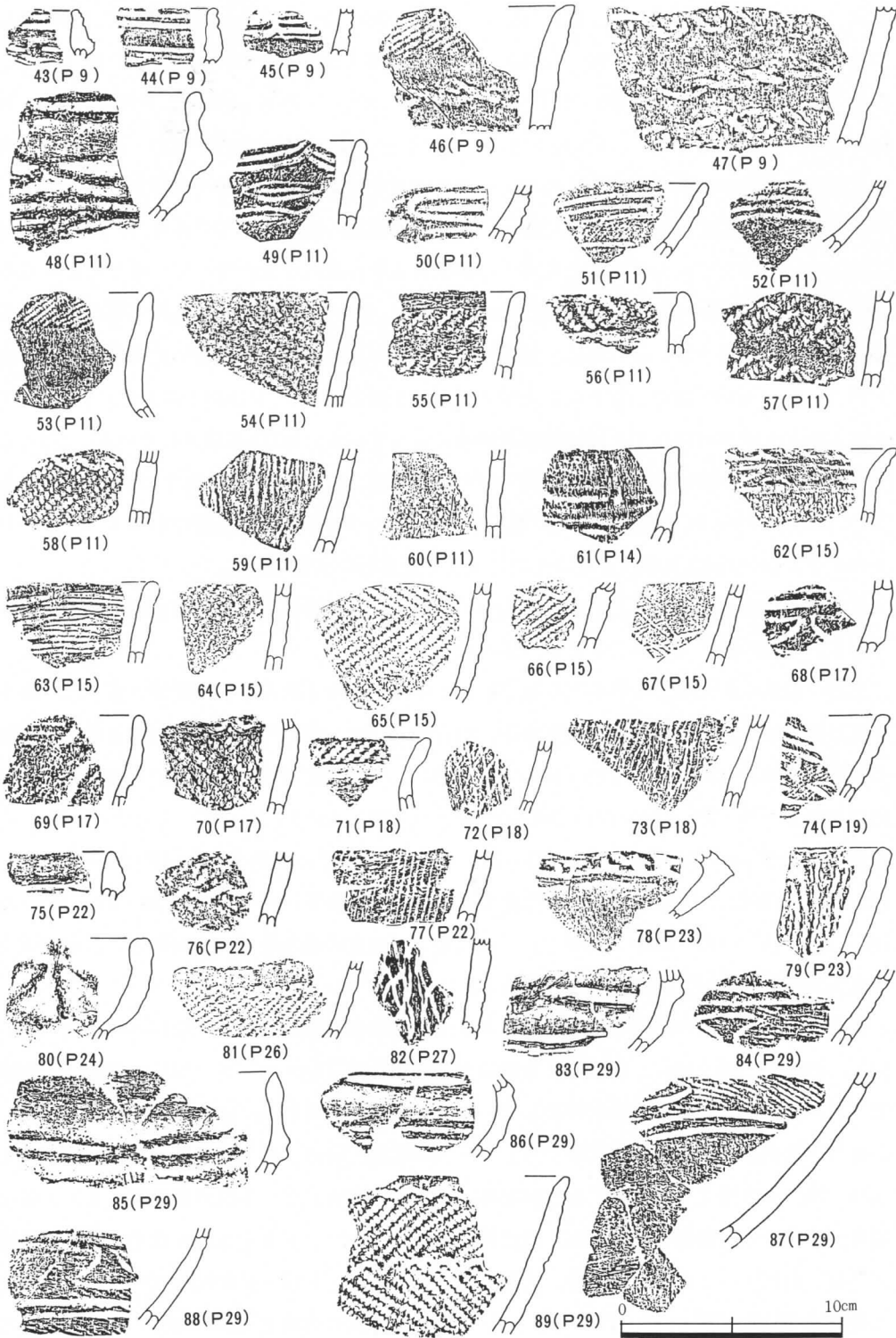
縄文晩期前葉の土器にはP15(62)、P39(104)やP51(131)の大洞BC式の羊歯状文のものがある。62は波状口縁で外に開き、口頸部には陽刻の羊歯状文を描き、体部に捺糸文が施されている。104・131も陽刻の羊歯状文である。なお、三叉文が主文様の大洞B式並行の土器は、今回の調査からは出土しなかった。

縄文晩期中葉の土器は、体部に磨消縄文手法の雲形文を特徴とする大洞C1・C2式のグループである。P8の17・18は陽刻の羊歯状文が退化して沈刻の帯になった土器で、いずれも大洞C1式の土器である。P23の78は屈曲する位置に三叉文の沈刻を加えたB突起風の文様がある注口土器である。大洞C1式の土器はこの他にP19(74)、P40(105・106)、P41(109)、P78(173)などから出土している。大洞C2式の土器は、P8から多く出土している。19～21・23～29がそれで、19～21は体部に雲形文が描かれており、23は口頸部が無文で、体部への屈曲点に浮線楕円文(眼鏡状浮文)が描かれ、27・28は縄文を地文として上に沈線で工字文風のモチーフがある朱彩の浅鉢形土器である。これらは大洞C2式の中でも大洞A式に近いものと考えられる。同じP8出土に29の壺形土器がある。大小の波状口縁を持ち、外面は無文、口縁内部に数条の沈線が引かれている。P29の84・87・88は体部に雲形文があり、同一個体と思われる浮線楕円文(眼鏡状浮文)の85・86とあわせて口縁部が立ち上がる浅鉢形土器である。また、P60の143・144・145は同一個体で浮線楕円文である。この他に大洞C2式並行の土器は、朱彩されたP11の51のほか、P32(90)、P65(157～159)、P72(167)、P79(191)、P110(221・222)などから出土している。大洞C1式と大洞C2式の明瞭な区別はできないが、雲形文の土器はP34(98)、P56(139)、P79(191)、P116(225)などのピットに出土例がある。

縄文晩期後葉の土器は、今回の調査で最も多く出土した工字文の土器群で、大洞A式に並行するものである。P3(4・5)、P4(6・7)、P6(12～14)、P9(43～45)、



第9図 出土土器(1) (カッコ内はピット番号)



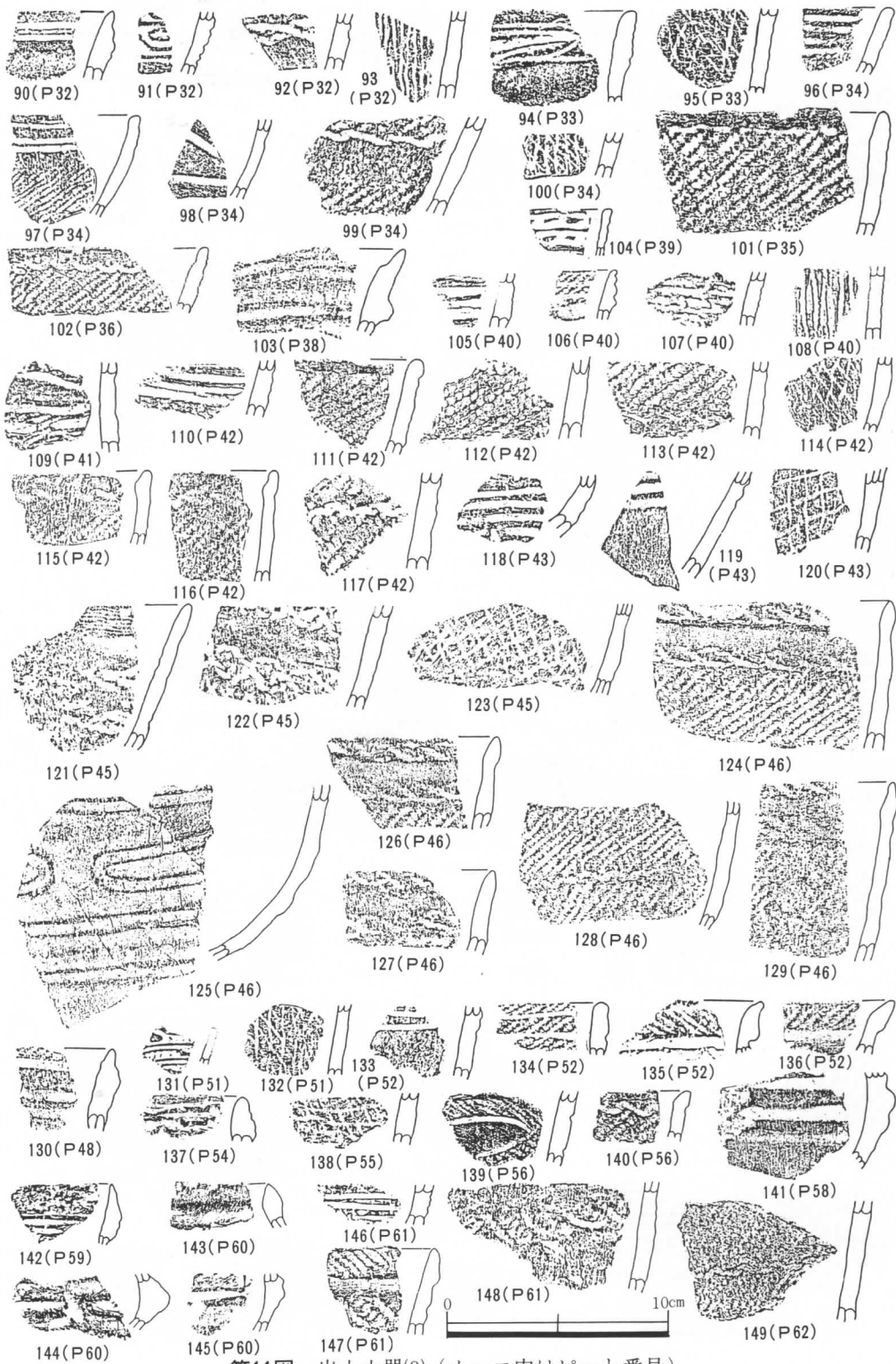
第10図 出土土器(2) (カッコ内はピット番号)

P11 (48~50)、P14 (61)、P15 (63)、P17 (68)、P32 (91)、P34 (96)、P38(103)、P42 (110)、P43 (118・119)、P46 (125)、P48 (130)、P54 (137)、P58 (141)、P65 (157・159)、P78 (172・175)、P86 (200・201)、P96 (206)、P103 (212)、P104 (213)、P107 (215)、P109 (217・218) などのピットと包含層 (230・231)から大洞A式並行の土器が出土した。P6の14は浮線工字文で関東地方の影響を受けた土器である。P11の48も浮線工字文の土器で口縁部が立ち上がる器形の浅鉢形土器である。P11の49・50は楕円風の工字文で、大洞C2式並行の浮線楕円文から流れを受け継いでいると考えられる。125の工字文も浮線で描かれ、浮線は2本を1組としている。器形は若干丸みを帯びた浅鉢形土器である。80 (P24)は口縁部に突起がつき、削り出しによる隆起線で三角形の文様が施されている。朱彩土器で、おそらく大洞A式期の土器であろう。P58出土の141は、他の工字文の土器より厚手の作りで、沈線間は蒲針状になっている。141は朱彩されている。172の工字文は、「工」が向い合う位置に2個一対の瘤がある。175は工字文であり、朱彩されている。217・218 (P109)は多段に工字文が施された土器で、217は深鉢形土器であろう。また、P2の1とP78の174は矢羽状沈線の土器で大洞A式並行の土器である。

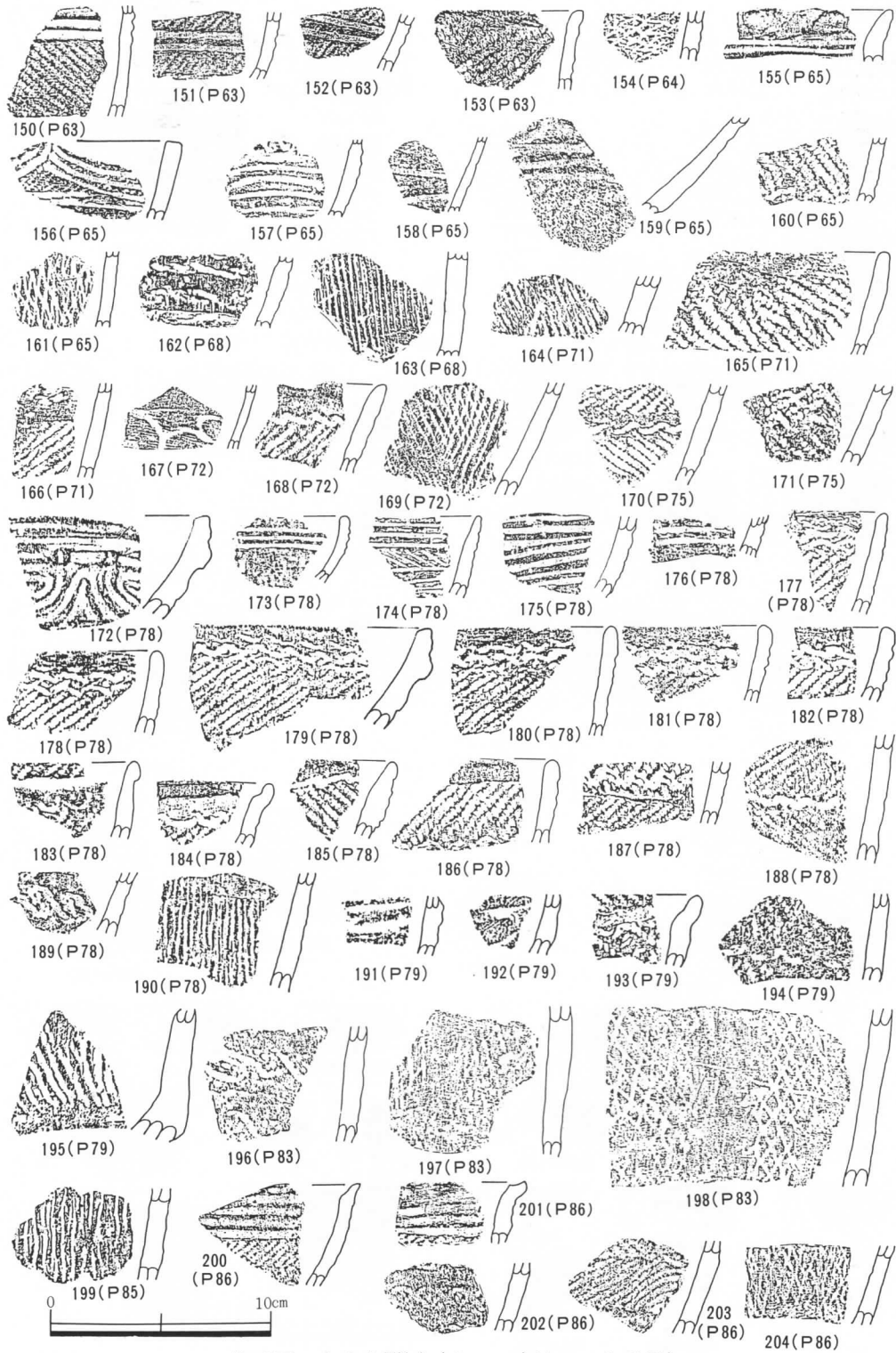
この他、変わった土器としては、P105の214がある。口縁部に円形に4ヵ所穴が空けられている。晩期に属するものであるが、詳細は不明である。

土器の器面全体に縄文や撚糸文を施文しただけのいわゆる飾らない「粗製土器」は、施文された文様によって数種類に分類される。斜行縄文 (3・101・165・203・210など)、結節斜行縄文 (102・128・168・185~187・208など)、羽状縄文だけのもの (32・65など)、結節羽状縄文 (35・89・170・171・188・209など)、撚糸文 (59・60・77・79・93・190など)、網目状撚糸文 (39・40・82・120・161・169・198・224など)、綾絡文 (8・47・55・57・92・127・184・189など)などがあり、斜行縄文と綾絡文の組合せ (9~11・33・34・37・38・124・126・128・177~183・219・220など)、斜行縄文と無文の組合せ (53・71など)、綾絡文と条痕文の組合せ (31・36など)などもある。

大洞C1・C2式の土器を出土したP8には、結節羽状縄文 (35)、網目状撚糸文 (39・40)、撚糸文 (41・42)、斜行縄文と綾絡文との組合せ (33・34・37・38)、綾絡文と条痕文 (31・36)などの粗製土器が伴出している。大洞C2式のP29には、結節羽状縄文 (89)がある。大洞C2式と大洞A式が出土したP11の粗製土器は、折り返し風の口縁に斜行縄文 (53・56)、綾絡文 (55・57)などがある。P4は大洞A式で、多段の綾絡文 (8)と斜行縄文と綾絡文との組合せ (9~11)の土器が共伴していた。P9も大洞A式で、多段の綾絡文 (47)が出土している。この他、大洞A式並行のP46・P78・P109などからも、斜行縄文と綾絡文 (124・126・128・177~183・219・220)、多段の綾絡文 (127・189)が出土し、綾絡文がこの時期の特徴的な粗製土器であることを示している。

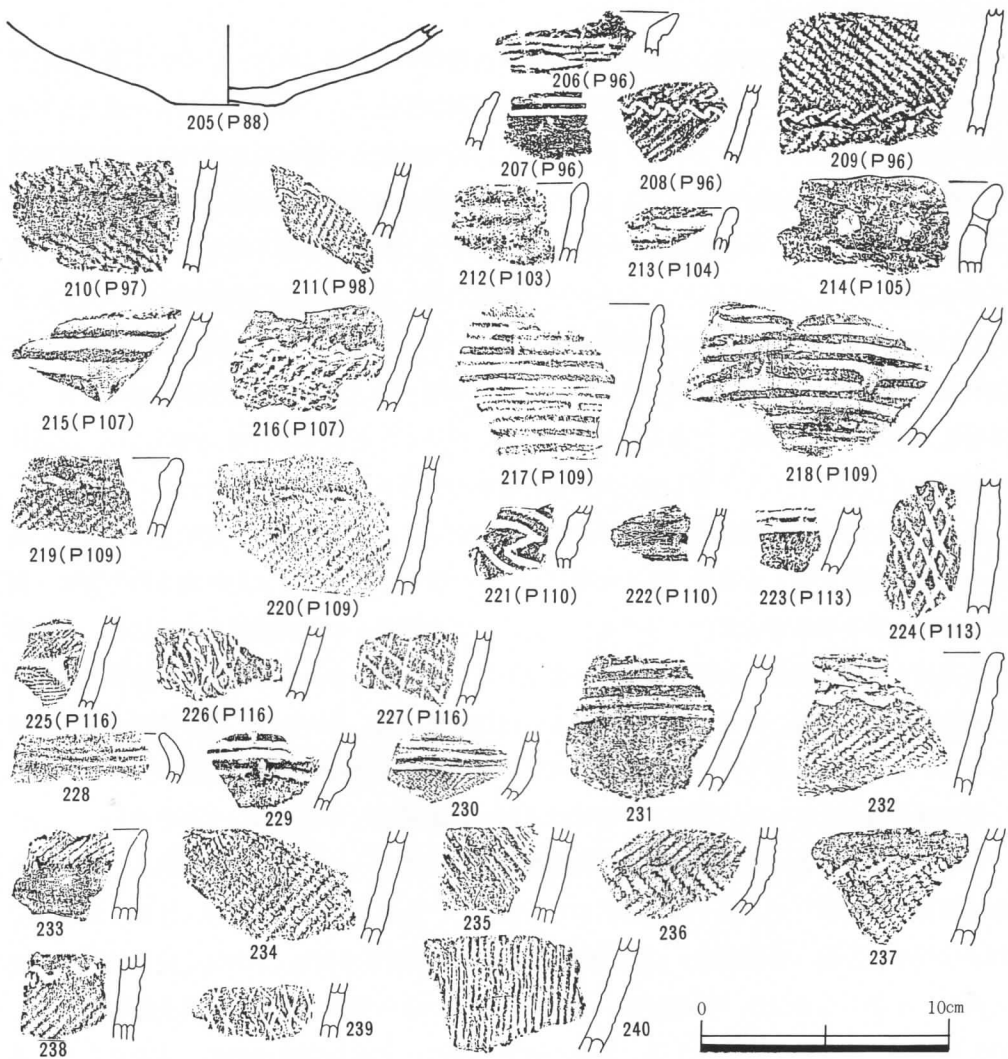


第11図 出土土器(3) (カッコ内はピット番号)



第12図 出土土器(4) (カッコ内はピット番号)

(2) 石器・石製品 (第17図) 本調査出土の土器以外の遺物は、石鎌6点(241~244)、石槍2(245・246)、石錘3(247~249)、砥石11点(250~252)、石皿1点(253)、小形石皿3点、磨石7点、凹石2点(254・255)、叩石1点(256)、板状石器3点(257・258)、磨製石斧3点(259~261)、磨製石斧未製品1点、石棒1点(262)、玉の加工品1点(265)、品種不明の石製品2点(263・264)がある。これらの多くは柱穴からの出土である。石槍に分類した245は大型な点から、246は全長が石鎌の倍以上の長さから石槍とした。石製品の263は半面が蒲鉾状に盛り上がり、溝が5条刻まれている。また、264は薄い板状の石の周囲を加工している。265は孔が穿ってある板状の石で、玉の加工品と考えられる。



第13図 出土土器(5) (カッコ内はピット番号)

4. まとめ

今回の調査は「歴史的建造物等の復原」を掘立柱建物で行うため、この掘立柱建物跡の検出を主目的に行った。この結果、120基をこえる柱穴等のピットを検出し、5棟の掘立柱建物跡を想定した。掘立柱建物跡は方形プランに棟持柱がついたタイプで、間取りは桁行が2間もしくは1間、梁間が1間である。

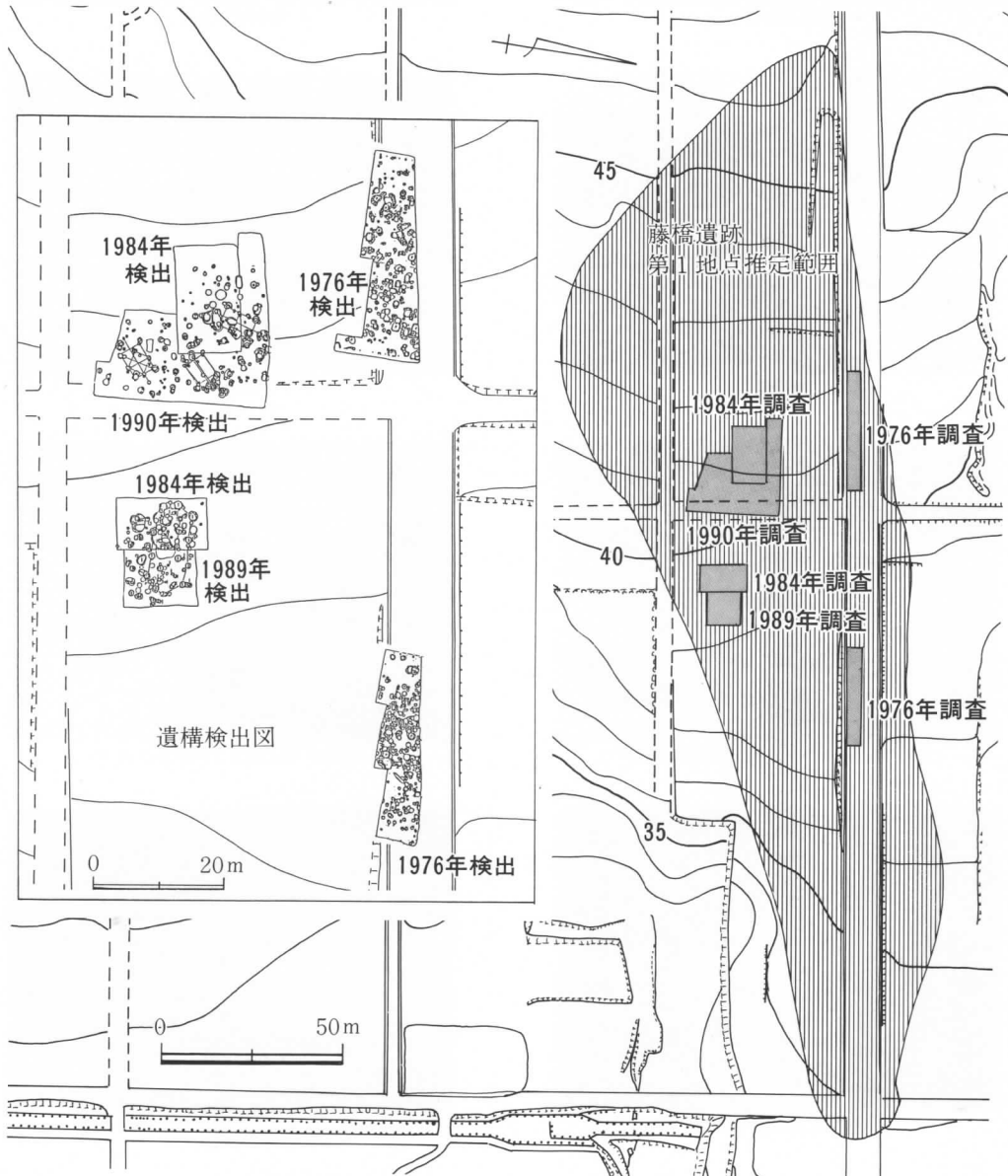
この掘立柱建物跡の上屋構造については、富山県桜町遺跡出土の建築部材（高床式建物の柱材）と長岡市岩野原遺跡第12号住居跡（掘立柱建物跡）の柱穴との対比から、高床の建物と推測した（駒形敏朗「高床式建物の起源」季刊考古学第32号 1990年）が、現段階でもこの推論の域を出ていない。この中には掘立柱建物跡内部や付近から炉跡が検出していないことも考慮に入れている。

次に構造的に高床式建物の可能性が高い掘立柱建物跡の機能（性格）について若干触れてみよう。本地点から、土偶・石棒などの呪術的な遺物が出土し、藤橋第1地点が縄文人の生活の場であった痕跡を示している。第1地点には縄文時代の一般的な住居の竪穴式住居跡及び炉跡などの内部施設は未検出である。また、新潟県の縄文時代掘立柱建物跡の面積は、10㎡をこえる例（駒形・小熊前掲書 1990年）が大半で、竪穴式住居と比べても人が住むには十分な空間があると思われる。これから縄文晩期の第1地点の掘立柱建物跡は、人が住まいした建物＝住居で、それだけで集落を構成していた、と考えられる。縄文晩期終末期の下田村藤平遺跡は、掘立柱建物跡だけの集落跡（家田順一郎「藤平遺跡発掘調査報告書Ⅱ」下田村教育委員会 1986年）である。このことから少なくとも新潟県の縄文晩期には、掘立柱建物跡だけの集落があり、第1地点の掘立柱建物の性格を考える上で参考になっている。

また、掘立柱建物跡は墓域に接して位置する例があることなどから、遺体を仮安置する殯宮のような機能を考える見解（佐々木勝ほか「東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅶ－西田遺跡－」岩手県教育委員会 1980年）がある。この殯宮との比較検討をするには、中期の西田遺跡と晩期の藤橋との間で機能的に変化していることも含めて中期から晩期までの掘立柱建物の系譜の問題、面積が居住空間あるいは仮安置に適しているか、柱の規模が永年使用を目的としたものかどうか、それに竪穴式住居跡の存在を含む集落全体配置の検討など、多くの問題が残されている。殯宮との検討は次回への課題として積み残しておきたい。

次に第1地点における集落跡としての展開を探ってみよう。1976年の確認調査（駒形・寺崎前掲書 1977年）で、第1地点の広がりやを推定し、市道拡幅工事（駒形・寺崎「埋蔵文化財発掘調査報告書－藤橋遺跡－」長岡市藤橋遺跡等発掘調査委員会 1977年）、史跡整備の調査（駒形・小熊・小林ほか「藤橋遺跡－史跡整備事業に伴う発掘調査－」長岡市教育委員会 1985年）、「ふるさと歴史の広場」事業の調査（駒形・小熊前掲書1990年、本調査）で、第14図の遺構検出図で示した位置に掘立柱穴跡を検出した。1984年以降の調査地は整備計画に

沿った位置であるが、1976年の調査は市道拡幅予定地の全域を発掘し、東西に分かれる2地点に限って掘立柱穴跡が分布することをつかんだ。1976年の結果は、第1地点北側の一部で中間に遺構の空白部を挟んで掘立柱建物跡が展開することを示している。その成果と、1984年以降の調査での成果—掘立柱建物跡の分布状況とを結びつけて第1地点の集落展開を考えるには若干発掘面積が不足している。そのため、ここでは1976年調査の成果から北側に向けて開く馬蹄形若しくは環状に集落が展開するだろうという予測を述べるに止めておきたい。



第14図 遺跡推定範囲及び遺構検出位置図



発掘調査風景



発掘調査風景



柱穴群



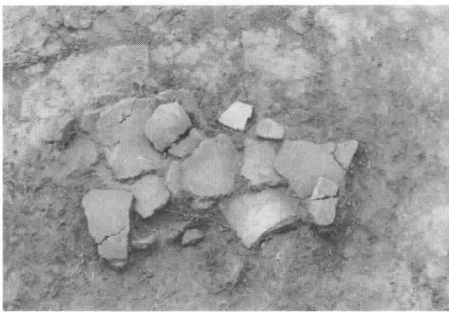
柱穴群



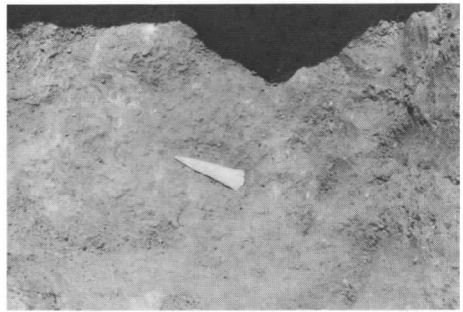
柱穴群(第3号・4号掘立柱建物跡周辺)



柱穴群(第6号掘立柱建物跡周辺)



土器出土状況 (P83)



石槍出土状況 (P74)

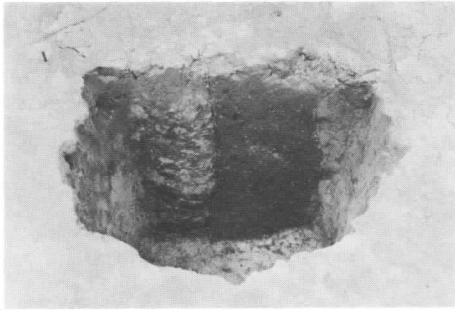
第15図 調査状況写真



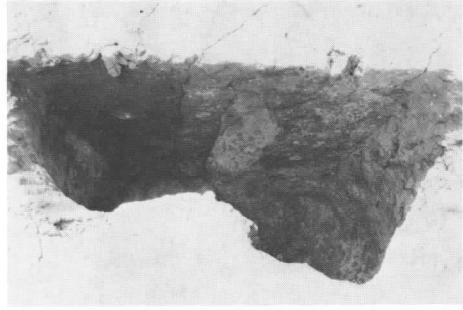
P75完掘状況



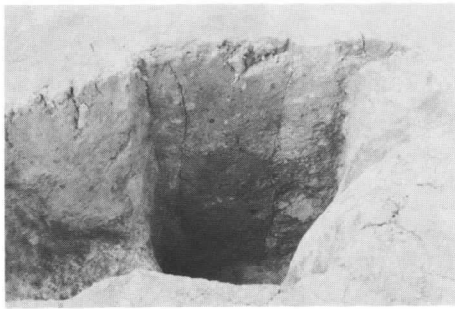
P27 (柱穴底面の石敷状況)



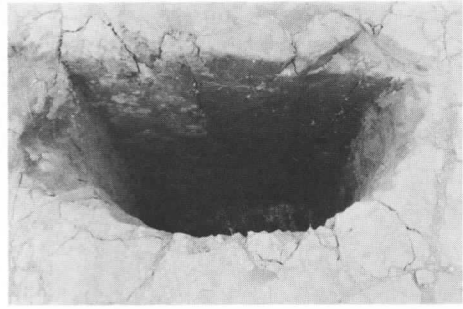
P14断面



P16断面



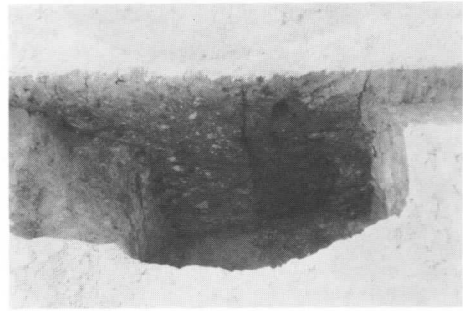
P18断面



P21断面

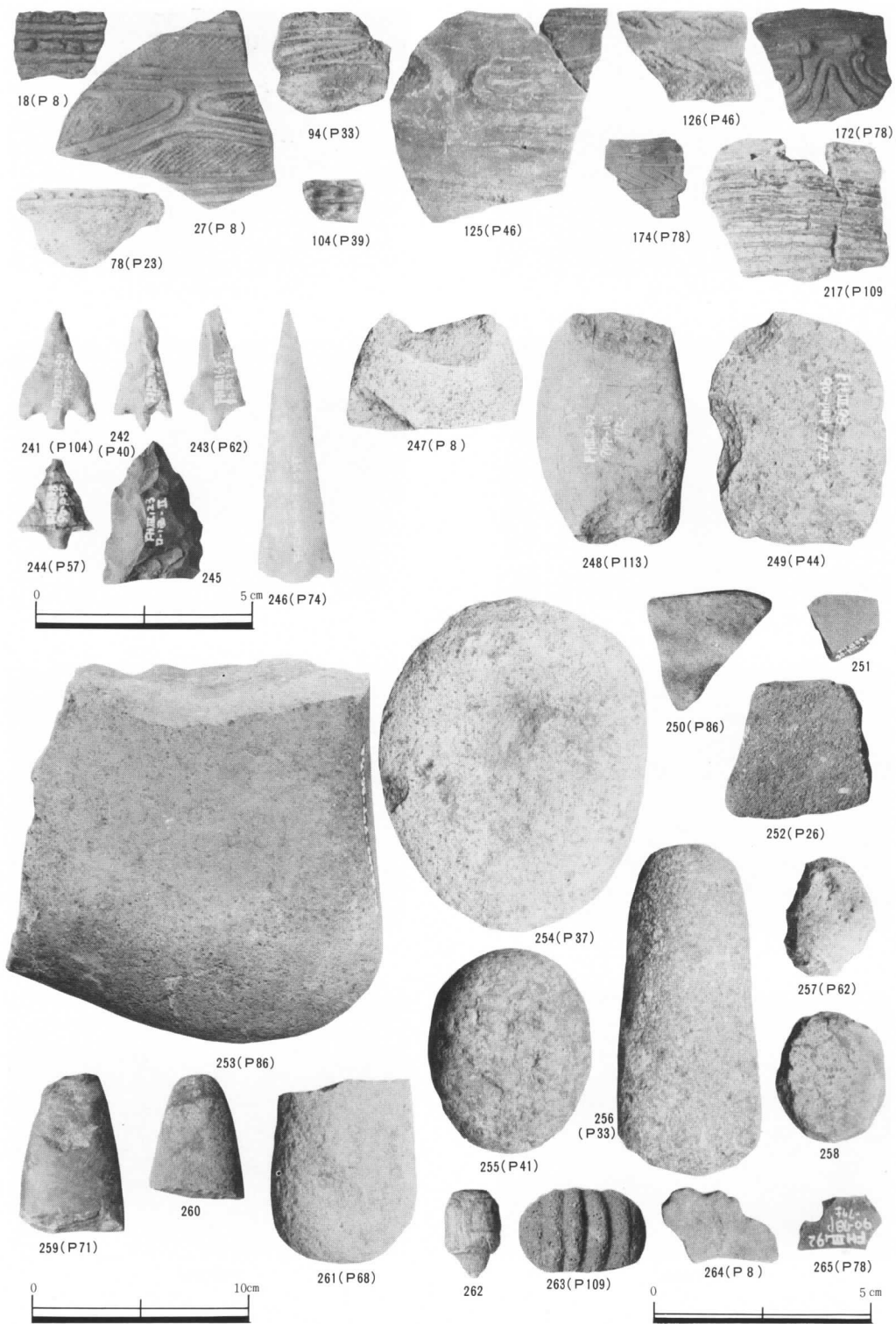


P47断面



P55断面

第16図 柱穴跡 (断面で黒色土が柱痕、マーブル状の堆積土が根固めの埋め土)



第17図 出土遺物（カッコ内はピット番号）

調 査 体 制

調査主体者 長岡市教育委員会（教育長 丸山 博）
調査担当者 駒形敏朗（長岡市教育委員会職員）
調 査 員 小林伸治（長岡市教育委員会職員）
調査作業員 深才地区有志ほか
調査事務局 木宮 敦（長岡市教育委員会社会教育課課長）、清水正一（同課課長補佐）
鈴木孝行（同課副主幹）、佐山美智子・笠原敏和（同課職員）

調査に御指導・御協力をいただいた方々（五十音順）

遠藤晴郎、小野塚栄一、木村権次郎、中島栄一、藤巻正信、宮本長二郎、藤橋遺跡保存会

藤橋遺跡

— ふるさと歴史の広場事業に伴う発掘調査 —

平成3年3月25日印刷 平成3年3月29日発行

発行：長岡市教育委員会 印刷：(株) 中 越
